



令和5年度 第10回共同機構研修会

令和6年1月19日(金)

主体としての子どもの思いを受け止め、心を育てる保育とは ～エピソード記述を通して考える～

講師 鯨岡 峻 京都大学名誉教授

私が考える人間観は、人間の心には矛盾が孕まれていることと、その心には正と負の二面があるというものです。この考えの根底には、「人間は誕生から死に至るまで、自己充実欲求と整合希求欲求という二つの根源的な欲求を抱えて生きている」という考えがあります。

子どもは皆、自分の興味や関心や欲求を追い求めようとします。これを「自己充実欲求」に根差した心の動きと呼び、他方で誰かと気持ちをつないで安心感や満足感を得たいという思いを、人間の「整合希求欲求」に根差した心の動きと呼んできました。この二つの根源的な欲求が内部で動き、様々な正と負の心の動きが生まれてきます。しかも、それは「私」という人間の内面の「私は私」「私は私たち」の心の二面に分かれるので、一人の人間の心は、二面・二重になっていると言えます。

人間が皆、二面・二重の心を持つという人間観は、そのまま主体は二面・二重の心を持つという主体観に結びつきます。これまで、主体という概念は、積極的・能動的な面を指す概念として用いられてきましたが、消極的・否定的な面も併せ持つ存在と見なければ、人間を丸ごと包含する概念になりません。人と人が関わり合う、相互主体的な関わり合いの中では、それぞれが根源的な欲求を持ち、その充足を図って生きようとしているのです。子どもと保育者の関係も例外ではありません。

子どもの心が正負両面にわたって動くとき、保育者は優しく受け止める「養護の働き」と、教えたり、場合によっては叱ったりする「教育の働き」をするでしょう。「養護の働き」は、子どもの大人への信頼感の出处であり、自己肯定感の源になります。「受け止める」は、この「養護の働き」全体を示す意味に理解できます。けれど「養護の働き」だけで子どもは成長しません。教導く「教育の働き」も必要です。

この二つの働きは、バランスを取ることが必要で、保育者は常に子どもの思いを汲みとり、それに応じたコミュニケーション的関わりをする中で紡がれます。そして、その関わりの中で得る無数の心的経験の積み重ねの中で「自己態勢」が形作られていきます。子どもは、幼い時から重要他者と関わり合う中で、正負の様々な心的経験を積み重ね、その経験を纏め上げて、信頼感や不信感、自己肯定感や自己否定感、自信などの心や、重要他者イメージや自己イメージを形作るようになって考えられます。その経験が纏め上げられていく際に、重要他者から「認められるか・認められないか」という評価の結果の「映し返し」が「自己態勢」に組み込まれると考えると、重要なポイントとなることがわかります。重要他者自身がこれまでどのように生活を重ね、「自分イメージ」をつくってきたかも、その子への「映し返し」に大きな意味を持つてくるでしょう。

ただし、子どもとのあいだに信頼関係がしっかり築かれていれば、負の「映し返し」も、そのまま負の意味を持たなくなるでしょう。本日の「映し返し」の議論を踏まえ、二つのエピソードを取り上げてみました。これらのエピソードには日々の保育の営みが凝縮されているのがわかります。

フィールド研修（保育現場から学ぶ研修）

コロナ禍のため中止していた「フィールド研修」を実施しました。この研修は、他園（所）の保育を見学する中で、参加者が自己課題にの解決に向けてのヒントを得たり、学びを深めたりする研修です。

他園（所）を見学することで、自園のあたりまえに新たな風を取り込み、共同機構として垣根を超えて互いの良いところを学び合う、そんな研修になればと願い実施しました。

年度途中の開催となりましたが、御協力いただいた園（所）、そして参加者の皆様に御礼を申し上げます。

明德幼稚園
1月15日実施

～こんな思いで参加しました～

～5歳児の保育・4歳児の保育～



明德幼稚園の作品展を鑑賞させていただき、どの絵も、自由でダイナミックで丁寧で、子どもたちが夢中になって取り組む姿が目につかぶようでした。そこで、子どもたちが主体的にこれらの活動に取り組むまでの教師の働きかけなど、そこに至る過程を学びたいと思いました。

子どもたちが自らやってみたいと主体的に遊ぶ姿につながる環境設定や教師の援助について学びたいと考えています。

～こんなことを学びたいな～

他園の3歳児クラスの様子や遊びを見るのが楽しみです。特に机上あそびに注目して、レパートリーを増やしたいです。

また、「一人ひとりが愛されている思いを充分に感じる保育」は本当に大切にしたいことであり、今一度考える機会となればいいな、と思っています。

聖三一幼稚園
幼稚園型認定こども園
1月23日実施

～5歳児の保育・3歳児の保育～



聖三一幼稚園の伸び伸びした活動やリズム遊びを見学させていただき、どこかマンネリになっている自分の保育を見つめ直すきっかけにしたいです。

就学前の園児に、どのような遊びや活動をなされているか、また、一人ひとりの園児への関わりについても学びたいです。

体幹遊びに力を入れ日々の保育に取り入れています。他園でのリズム遊びの活動を見学し、今後のカリキュラムの見直しや改善の参考にさせていただきたいです。

～0歳児の保育～

担当制での、一人ひとりの子どもへの関わり方、給食の場面での具体的な言葉がけや自立へ促す援助の仕方などを学びたいです。

壬生保育所
1月25日実施

～異年齢の保育～

担当制を始め、本を読んだり、研修を受けたりして、手探り状態。実際に保育を見せていただける機会なので、しっかり学びたいと思います。

異年齢保育について理解を深め、保育に活かしていくこと、年長児を中心としたクラス運営、子どもの興味や関心に沿って進めていく課題活動の取り組み方について学びたいと考えています。

～他園からの学びを实践へ～

異年齢の子どもたちが、様々なことに興味関心が持てる援助や保育者の動きの工夫、また、年齢によって理解や活動が異なる時に、配慮するポイント等を学びたいです。

事後アンケートより

- 子どもが自信をもって発言したり、活動したりできるような教師のかかわり方について改めて考える機会となりました。実際の保育をみて、子どもの姿、先生の言葉の掛け方、保育環境等、学ぶことができるので、とても貴重な研修だと思います。また、このような研修機会があるとよいなと思いました。
- 子ども一人一人の思いを受け止めつつ、優しく言葉をかけ、友だちと一緒に楽しめる雰囲気づくりをされているのが、伝わってきました。チームとして連携を取りながら保育をする大切さを改めて感じました。
- 子どもたちが主体的に学び、子ども同士がつながり合い、子どもが思考し、自ら動こうとすることを実現できる環境づくりと、それらを支え可能とする先生方の関わり方を学びました。大変学びの多い研修でした。
- 子どもたちと一緒に楽しみながら、遊び仲間になることをより意識していきたいと思いました。子どもたちの面白い発想と一緒に楽しみながら遊びをつくっていく姿勢を大切にしていきたいです。
- 他園の見学や保育を見せて頂く機会はほとんどないため、建物を見せて頂くだけでも、発見や面白さがありました。遊びやおもちゃ、環境、保育室なども見られて良かったです。
- 他園の保育を見る機会はないので、このような研修に参加でき、とても貴重な経験をさせてもらえました。



初めて実施する研修の協力園として、手を挙げてくださった3園(所)の勇氣と前向きで貢献的な精神に敬意を払い、心より感謝申し上げます。

2月に、来年度の協力園の募集を始めております。この研修の意義を御理解いただき、ぜひ御協力をお願いいたします。

第9回共同機構研修(動画配信) 「架け橋プログラムの更なる向上をめざして」

講師 秋田喜代美 学習院大学教授

第9回共同機構研修は、今大事にされている保幼小連携について、幼児教育から小学校教育への円滑な接続を図るとともに、保幼小が連携して「架け橋期」(5歳児から小学校1年生の2年間)の教育の質的向上を推進するために、どのように取り組めばよいかについて学ぶ研修でした。秋田先生が様々な都市の取組についてもお話くださったことで、新たなヒントを得られたのではないのでしょうか。今回の研修は、京都市教育委員会学校指導課が市立校園に向けて発信をされた幼保小接続研修会(架け橋プログラム研修会)の録画動画を配信しました。

動画配信の研修は、参加しやすいと、たくさんの先生方にご覧いただくことができました。1つの園(所)でたくさんの方で見ていただいたり、地区研修会の一部にいただいたりしました。ありがとうございました。引き続き、動画配信の研修を取り入れていき、より多くの方に、学びの場を提供したいと思っております。

以下は、今回の研修に参加された先生方の御感想です。

架け橋プログラムについて学び、子どもと子どもがつながり合う、あそびと学びの世界がつながり合う、過去の経験と今、未来がつながり合う大切さを改めて感じました。子どもの笑顔のために、架け橋プログラムを通して、ワクワクの連鎖が生まれるよう努めたいです。

園と小学校の連携、先生の見学など、協力の元、子どもたちの安心につながるので、よい取り組みだと思う。参考にして、できることを取り組んでいきたい。

全国の様々な取組を知ることができ、架け橋だけではなく、今の保育にも活かしたり、今後どうしていきたいかを考えたりする、きっかけをもらえました。

小学校との交流がいかに大切か、子ども同士の交流はもちろん、両担当の先生同士の意見交換、カリキュラム作成のための話し合いの必要性について、深く学ぶことができました。また、実際に足を運ぶことで学ぶこともできると知り、今後考えていきたいと思いました。

子どもが興味を示したことにどれだけ応えてきているか。日頃の関わりの重要性も反省し、今後に生かしたいです。

架け橋期の2年間が学びや生活の基盤をつくる大切な時期で、単に連携をすれば良いのではなく、質の向上が大切だということがわかった。

小学校と連携をしていきたい思いと共に、自分の保育を見直し、更なる向上を目指しておられる御感想が多く、京都市の先生方の今回の研修での学びを生かしていこうとされる熱い思いを感じました。

子どもを育む喜びを感じ、
親も育ち学べる取組を進めます。

[京都はぐくみ憲章]より



この印刷物が
不要になれば
「雑がみ」として
古紙回収等へ!



発行日 令和6年2月21日
発行者 京都市子育て支援総合センターこどもみらい館
〒604-0883 中京区間之町通竹屋町下る楠町 601-1
Tel : (075)254-5001 Fax : (075)212-9909
URL : <https://www.kodomomirai.city.kyoto.lg.jp/>

